Osaka University Knowledge Archive

Title	嫉妬的ステレオタイプの抑制における代替思考方略の効果
Author(s)	田戸岡, 好香; 村田, 光二; 石井, 国雄
Citation	対人社会心理学研究. 2014, 14, p. 35-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/36098
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

嫉妬的ステレオタイプの抑制における代替思考方略の効果 1)

田戸岡好香(一橋大学大学院社会学研究科)
村田光二(一橋大学大学院社会学研究科)
石井国雄(明治学院大学心理学部)

本研究は、高地位者に対する嫉妬的ステレオタイプを抑制する際の代替思考方略の有効性を検討した。ステレオタイプを抑制した後には、かえってステレオタイプのアクセスビリティが高まるリバウンド効果が生起する。こうした弊害を生じさせずに抑制を可能とする方略として、ステレオタイプの両面価値性に注目し、ネガティブなステレオタイプ特性(e.g., 冷たい)を抑制する時に、別の次元の特性(e.g., 有能)を代替思考とする方略の有効性を検討した。具体的には、参加者より偏差値が高い大学生を呈示し、ネガティブなステレオタイプを抑制する際、代替思考の操作をした。その後、ステレオタイプのアクセスビリティを測定した。実験の結果、自尊感情が高い場合にはリバウンド効果が低減したが、自尊感情が低い場合には、高地位者を有能だと考えることは脅威になりうるため、リバウンド効果は低減しなかった。本方略の有効性と限界点について、ステレオタイプ内容モデルの観点から考察を行った。

キーワード: 嫉妬的ステレオタイプ、抑制、リバウンド効果、代替思考、ステレオタイプ内容モデル

問題

昨今、学歴偏重主義による受験戦争の激化や、社会における実力主義の普及などによって、自分よりも優れた他者を意識する機会は頻繁に生じうる。ステレオタイプ内容モデル(Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002)によれば、そうした相対的に高地位とみなされる集団成員に対して、私たちは「有能だが冷たい」というステレオタイプを抱き、嫉妬感情を生起させることが指摘されている。例えば、Glick & Fiske(2001) によれば、多くの女性が社会進出を果たした結果、男性は、本来自分達が優位であるはずの仕事という場において、キャリア女性に対してネガティブなステレオタイプを抱くことがある。そうしたステレオタイプは女性の昇進や社会進出を阻む一因となることが指摘されている。また、高学歴者などのエリート男性にも同様のステレオタイプが抱かれており、雇用時や仕事場面において、人物評価自体が学歴に左右される問題が指摘されている(池上, 1992; 佐々木, 1997)。

このように、エリートやキャリア女性といった集団は、有能であるということを認められながらも、冷たいとネガティブにみなされる問題が指摘されている。そこで私たちは平等主義的な規範に従い、ステレオタイプ的な判断を避けようと抑制を行うことがあるが、そうした抑制はかえって弊害をもたらすことがある。Macrae, Bodenhausen, Milne, & Jetten(1994)はステレオタイプを抑制した後には、抑制をしない場合よりも、当該ステレオタイプのアクセスビリティが上昇するリバウンド効果という現象が生起することを実証した。Macrae et al.(1994) は、参加者にスキンヘッドの男性の写真を呈示し、その人物の典型的な一日を記述するよう求めた。その際、半分の参加者にはスキンヘッドのステレオタイプに基づいて書かないよう教示し、もう半分の参加者にはそうした教示はしなかった。その後、再度、別のスキンヘッド男性の一日を記述するよう求めたところ、抑制をした参加者は、しなかった参加者よりもステレオタイプに基づいた記述を多くしていた(実験 1)。さらに実験 3 において、抑制操作後に当該ステレオタイプのアクセスビリティを測定したところ、抑制をした参加者は、しなかった参加者よりもステレオタイプのアクセスビリティが上昇していた。このように、抑制によってかえってステレオタイプのアクセスビリティが増加するため、その後の判断や行動に影響を与えることがある。

この知見と一致して、キャリア女性(Tado'oka & Murata, 2012)や金融ディーラーのようなエリート男性(田戸岡・村田, 2011)に対する嫉妬的ステレオタイプを抑制した後にもリバウンド効果が生起することが示されている。特に、嫉妬的ステレオタイプの抑制においては、抑制対象に競争意識を知覚するような場合には、リバウンド効果が生起しやすいことが明らかになっている(田戸岡・村田, 2011; Tado'oka & Murata, 2012)。実力主義や成果主義など、現代では競争的な場面に直面することが多い。そうした場面では、競争状況自体をなくすことは困難であり、嫉妬的ステレオタイプを他者にあてはめることによる弊害が生じる可能性が高まると

考えられる。このように、嫉妬的ステレオタイプが社会的に特に問題となるのは、競争状況であると考え、本研究では、競争状況における嫉妬的ステレオタイプの抑制後に、リバウンド効果を低減するための方略を検討することとした。

リバウンド効果の生起メカニズム

リバウンド効果の低減方略を検討するために、まず、なぜ抑制するとリバウンド効果が生起してしまうのかを整理しておく。Wegner(1994)によると、思考抑制は二つの過程によって行われる。一つは、抑制対象となる思考が意識内に生じていないかをチェックする自動的な監視過程(monitoring process)である。抑制対象を自動的に監視するためには、避けるべき対象の表象を活性化しておく必要がある。もう一つは、抑制対象とは別の思考(代替思考)を生み出すことで抑制対象を意識から追い出す過程で、これを実行過程(operating process)という。もし実行過程がうまく機能している場合には、代替思考が抑制対象から意識をそらす役割を果たす。その結果、抑制対象が意識内に生じないため、監視過程が厳重にならず、対象のアクセスビリティは必要以上に高まることはなくなる。実際、思考抑制研究では、白クマに関する思考を考えないようにする際、赤のフォルクスワーゲンを代替思考として与えると、リバウンド効果が生起しなかった(Wegner, Schneider, Carter, & White, 1987)。他方で、代替思考を生成できずに実行過程が十分機能しない場合には、抑制対象から注意をそらせず、対象が意識上に侵入しやすくなる。すると、意識内に侵入した抑制対象を監視過程が察知し、対象を排除するために抑制意図が強まる。そうすると、監視過程がより厳重に働き、結果として抑制対象へのアクセスビリティが過度に高まるリバウンド効果が生起するのである。

ステレオタイプ抑制の代替思考方略

以上のように、抑制時に代替思考を用いることで、実行過程が十分に機能すればリバウンド効果は生起しない。しかし、ステレオタイプ抑制では、代替思考の内容によっては、リバウンド効果が低減できないことが示されている。一般的に、ステレオタイプ抑制においては、ステレオタイプとは反対の意味を持つ反ステレオタイプが代替思考として用いられやすい。例えば、黒人ステレオタイプ(e.g.,「攻撃的な」)を抑制する時には、「優しい」などの反ステレオタイプ的特性が代替思考として用いられることが示されている(Galinsky & Moskowitz, 2007)。しかし、反ステレオタイプは、元来持っている知識とは反対の思考であり、抑制対象の表象に含まれないため、反ステレオタイプ的な思考の生成には困難が伴う。その結果、抑制対象から注意をそらすという代替思考の役割を果たせず、リバウンド効果が生起してしまう。実際、田戸岡・村田(2010)では、「高齢者は無能だ」というステレオタイプを抑制する時に、「高齢者は有能」という反ステレオタイプ的特性を代替思考として用いようとしていたが、生成が難しいため、リバウンド効果が生起した。

他方、リバウンド効果を低減させる代替思考方略も明らかになっている。田戸岡・村田(2010)はステレオタイプ内容モデルに基づき、リバウンド効果を低減させる代替思考方略を提案した。ステレオタイプ内容モデルによれば、ステレオタイプの内容は人柄と能力の二次元から構成されている(Fiske et al., 2002)。人柄はその集団が自分と競争関係にあるか否かで決定され、競争関係にある場合には「冷たい」とみなされ、協力関係にある場合には「温かい」とみなされる。他方、能力は自分や内集団に対する対象集団の地位の上下関係によって決定される。この二次元の評価はそれぞれ独立にポジティブもしくはネガティブな内容を形成するが、その中でも、一方の次元(e.g., 人柄)がポジティブなら、他方の次元(e.g., 能力)がネガティブになるという、両面価値的ステレオタイプが多くみられる。例えば、先ほど例示した高齢者は、相対的に低地位で協力的だとみなされるため、そのステレオタイプは、無能であるだけではなく、温かい人柄であるという慈悲的な内容を含むことが明らかになっている。他方、今回取り上げたエリートやキャリア女性は高地位だとみなされやすいが、競争的であるため、仕事はできるが、冷たい人物であるという嫉妬的な内容を含んでいる。田戸岡・村田(2010)はステレオタイプの大部分はこうした両面価値的な内容を含んでいるということに注目し、ネガティブなステレオタイプ特性を抑制する際に、その特性とは別次元のポジティブなステレオタイプ特性を代替思考とする別次元思考方略を提案した。高齢者に対する慈悲的ステレオタイプを題材として、「高齢者は無能だ」というステレオタイプを抑制する際に、代替思考として「高齢者は温かい」と考えた参加者は、代替思考を用いなかった参加者や反ステレオタイプ(有能)を考えた参加者に比べて、リバウンド効果が低減していた。これによって、ポジティブなステレオタイプ特性はステレオタイプの内容に含まれるため、抑制時に容易に生成することができ、リバウンド効果を低減させる代替思考となることが

示された。

脅威がステレオタイプ抑制に及ぼす影響

以上のように、抑制する特性とは別の次元のステレオタイプ的特性は代替思考として生成しやすいため、リバウンド効果を低減させることが示されてきた。ただし、上記の知見は低地位者に対する「温かいが無能」という慈悲的ステレオタイプにおけるものであり、高地位者に対する嫉妬的ステレオタイプにおいてもこの方略が有効であるかどうかは明らかではない。嫉妬的ステレオタイプにおける別次元思考方略は、「冷たい」というネガティブな特性を抑制する際に、自分より優れた対象を「有能だ」と考えることである。しかし、高地位者を有能だと考えることは、場合によっては困難かもしれない。なぜなら、自分にとって重要な領域での他者の優れた遂行が自己価値に脅威を及ぼすという指摘があるように(Tesser, 1988)、競争的な状況において外集団成員の有能さを強調することは、自分が搾取されるという意識が強まるため、自己価値に対する脅威を与える可能性があるだろう。

では、このような脅威状況は、ステレオタイプの抑制過程にどのような影響を及ぼすのだろうか。人は自己価値に脅威を感じるときには、ワーキングメモリの機能が低下する(Eysenck & Calvo, 1992)。ワーキングメモリとは、情報を一時的に保ちながら処理するための構造である。男女の数学の成績の性差を調べていると伝えられた女性参加者は、「女性は数学ができない」というステレオタイプを確証してしまうのではないかという脅威を感じた結果、ワーキングメモリの容量が少なくなっており、数学の問題を解く処理ができず、成績が低下していた(Schmader & Johns, 2003)。同様に、数学不安が高い参加者は、数学の能力が測定されると伝えられると、ワーキングメモリが減少していた(Ashcraft & Kirk, 2001)。特に、こうした自己価値への脅威を感じる場面では、不安に関連した思考が生成されるため、言語的ワーキングメモリの機能が低下するという(Beilock, Rydell, & McConnell, 2007)。このことを前提とすると、有能な外集団に対するネガティブな「冷たい」というステレオタイプを抑制する際、当該集団からの脅威を知覚した場合には、不安関連思考によって言語的ワーキングメモリが低下することになる。思考抑制では、望まない思考を排除しながら、代替思考を生成するという二つの処理を同時に行う必要があるため、ワーキングメモリが必要だと考えられている。実際、ワーキングメモリの容量が少ない参加者はリバウンド効果が生起しやすいことがいくつかの研究で示されている(Brewin & Smart, 2005; Geraets, Merckelbach, Jelicic, & Habets, 2007)。これらの知見から、抑制時に脅威を知覚することで言語的ワーキングメモリが不安関連思考で占められると、抑制対象から意識をそらすための代替思考を生成することが困難になり、リバウンド効果が生起することが示唆される。

本研究で検討する別次元思考方略は、ポジティブなステレオタイプ特性を代替思考とする方略である。認知資源が不足しているとステレオタイプでさえ活性化が阻害されるという知見(Gilbert & Hixon, 1991)を考慮すると、脅威によって言語的ワーキングメモリが低下している際には、ステレオタイプであっても代替思考を考える余裕がなくなり、生成が困難になる可能性があるだろう。具体的には、「冷たい」というステレオタイプを抑制する際に、別次元の「有能」というポジティブなステレオタイプ特性を代替思考として用いようとすると、抑制対象に脅威を感じてしまう場合があり、そうした場合には言語的ワーキングメモリが低下する。そのため、有能性を感じていたとしても、それを代替思考として考えることは困難だろう。結果として、抑制対象から注意をそらすことができず、「冷たい」という思考が侵入し、厳重になった監視過程によって「冷たい」というステレオタイプのアクセスビリティが過度に上昇するだろう。こうした過程によって、有能な外集団成員に脅威を感じる場合には、別次元思考方略を用いても抑制後のリバウンド効果を低減させることができないと考えられる。

ただし、近年の研究では、自尊感情が脅威に対する緩衝材になることが知られている(Pyszczynski, Greenberg, Solomon, Arndt, & Schimel, 2004)。すなわち、自尊感情が高い場合には脅威に耐性があるため、抑制対象を有能であると認めることができ、ワーキングメモリが低下しないだろう。この場合、有能思考はステレオタイプなので生成しやすく、抑制対象から注意をそらすことができるため、リバウンド効果が低減すると考えられる。すなわち、特に高自尊感情者において、別次元思考方略は有効な可能性があるだろう。このように、嫉妬的ステレオタイプにおける別次元思考方略は脅威を生じさせうるため、その有効性は限定されたものであるだろう。こうした方略の有効性と制限条件を示すことが本研究の目的である。

本研究の概要

本研究では、慈悲的ステレオタイプの抑制にお

いて有効性が示されている別次元思考方略が、競争状況における嫉妬的ステレオタイプの抑制においても有効なのかを検討する。

具体的には、事前に自尊感情を測定しておき、実験室において抑制時の代替思考を操作した。本研究では、大学生を参加者とし、参加者と抑制対象との直接的な競争関係場面を設定した。大学生は、相対的に自分よりも高偏差値な大学生に対して「有能だが冷たい」というステレオタイプを抱きやすいことが確認されている(沼崎, 2013)。そこで、抑制対象を典型的な高偏差値大学である東京大学の学生とし、就職活動場面で競争相手となるような場面を呈示した。そうした場面において、ステレオタイプを抑制するよう教示される単純抑制条件を設けた。また、代替思考の操作として、反ステレオタイプを代替思考とした場合にはリバウンド効果が生起することを確認するため、反ステレオタイプ的特性(東大生の温かさ)を用いる温かさ思考条件を設けた。加えて、東大生ステレオタイプの内容の一つで、抑制する特性(冷たい)とは異なる次元(有能－無能)に注目し、東大生の有能さを代替思考とする有能思考条件を設けた。統制条件では抑制教示はしなかった。

その後、リバウンド効果を測定するために対人認知課題を行った。対人認知課題とは、年齢や性別などのカテゴリー情報を明示せずに、ある人物の情報を呈示し、その人物の印象を評定させるものである。当該ステレオタイプのアクセスビリティが上昇している時ほど、印象はそれに沿ったものになりやすい(e.g., Srull & Wyer, 1979)ため、本研究では、やや冷たい印象を持たれるような人物の文章を呈示した。その上で、その人物を冷たいと評定する程度を「冷たい」というステレオタイプのアクセスビリティの指標とし、リバウンド効果を測定することとした。

仮説として、単純抑制条件および温かさ思考条件は、冷たさに関して曖昧な人物をより冷たいと評定するリバウンド効果が生起するだろう。しかし、有能思考条件では、文章の人物を冷たいと評定せず、リバウンド効果が低減するだろう。ただし、リバウンド効果の低減は高自尊感情者のみにみられるだろう。自尊感情が低い参加者にとっては、高地位な対象の有能さを強調することは脅威となるため、統制条件よりも文章の人物を冷たいと評定するリバウンド効果が生起するだろうと予測した。

方法

予備調査

東大生に対する「冷たい」というステレオタイプが一般的に持たれているかを検討するために、本実験を行った大学において 15 名の協力者に予備調査を行った。一般的な東大生に対してどのようなイメージを持っていますかという質問に対して、冷たさに関する形容詞 4 語について 9 件法で回答を求めた(1:全くあてはまらない－9:非常にあてはまる)。これらの合算平均値に対して、中点(5:どちらともいえない)との差の検定を行ったところ、東大生に対して有意に冷たいという評定(M = 5.65, SD = 1.13)をしていた($t(14)$ = 2.23, p < .05)。よって、本研究を行った大学においては、東大生に対して冷たいというステレオタイプが持たれていることが確認された。

実験参加者

実験参加者は、東京都内の大学で心理学関連の授業を受講している大学生で、事前調査への回答を行った 78 名であった(男性 54 名、女性 24 名、平均年齢 19.19 歳、SD = 1.14)。参加者は統制条件、単純抑制条件、温かさ思考条件、有能思考条件のいずれかの条件に無作為に割り当てられた。参加者は実験に参加することで授業の出席点を与えられた。

特性自尊感情の測定

実験の 1 か月以上前に特性自尊感情を測定した。Rosenberg(1965)の Self-Esteem Scale の邦訳版である自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)への回答を 5 件法で求め、合算平均値を自尊感情得点とし (α = .83)、連続変量として扱った。

手続き

2～4 名の小集団で実験室実験を行った。実験は三つのフェーズで構成されていた。無関連な短い実験を二つ行うというカバーストーリーのもと、抑制フェーズを「実験 1」、フィラーフェーズ・測定フェーズを「実験 2」として、実験を実施した。

抑制フェーズ 第一実験者は将来の就職活動場面について想像する能力を調査しているというカバーストーリーを伝え、参加者が就職活動場面にいることを想像させた。質問紙と男子東大生の写真を配布し、就職活動において参加者である「あなた」がライバルである東大生とグループワークをするというシナリオを呈示した。課題では、この東大生がどのようにふるまうと思うかについて『東大生は__』で始まる文章を 5 分間でできるだけ多く記述するよう求めた。その際、統制条件以外の 3 つの条件で

は、抑制操作として、「『東大生のようなエリート男性は他人に冷たい』などといったイメージがありますが、そういったイメージに基づいて書かないように注意してください。」と教示した。温かさ思考条件では上記の抑制教示に加えて、「代わりに『人あたりが良い』というような、従来の東大生とは反対のイメージに基づいて書くようにしてください。」と教示し、代替思考の操作を行った。また、有能思考条件では抑制教示に加え、「代わりに『かしこい』というような、東大生の有能さに関するイメージに基づいて書くようにしてください。」と代替思考の操作を行った。統制条件では抑制操作および代替思考操作の教示はしなかった。課題を 5 分間行った後、第一実験者は一つ目の実験は終了であると伝え、退室した。

フィラーフェーズ　抑制フェーズと測定フェーズが無関連であることを強調するために、人の瞬間的な判断を調べる課題を 2 種類行うというカバーストーリーのもと、第二実験者が「実験 2」として、以下のフェーズを担当した。フィラーフェーズでは、数字に対する瞬間的な判断を調べるとして、100 マス計算を 2 分間行った。

測定フェーズ　続いて、人が印象を瞬間的に判断する過程を調べるというカバーストーリーのもと、対人認知課題をノートパソコンを用いて行った。実験刺激の呈示とデータの収集は実験ソフトの Inquisit を用いて制御した。この対人認知課題の印象評定が、抑制後の当該ステレオタイプのアクセスビリティの指標であった。森(2000, pp.35-36)を参考に、ターゲット人物が他者に対してやや冷たい行動をとるが、それが状況によるものなのか、特性によるものなのかが曖昧な行動文 4 文を含む合計 26 文の文章を作成した。文章は、主人公である「私」とその友人の「佐々木さん」(ターゲット人物)のある一日の行動を描写したものであった。文章をパソコンの画面上で 1 文ずつ呈示した後、ターゲット人物に対する印象を評定するよう求めた。評定には、沼崎(2013)を参考に、冷たさを測定するために、「優しい(逆)」、「冷たい」、「とっつきにくい」、「謙虚(逆)」といった冷たさに関するステレオタイプ 4 語と、フィラー語を 10 語用いた。文章を読んだ後、画面の中央に評定語が一語ずつ表示され、画面の下部に「1:全くあてはまらない－5:どちらともいえない－9:非常にあてはまる」と示され、これに基づいて数字のキーを押して評定するよう求めた。その際、評定語が呈示されてからキーを押して評定するまでの反応時間を一語ずつ測定した。なお、印象判断に関しては、社会的望ましさや自己呈示に基づく回答の歪みを抑えるため、できるだけすばやく行うよう求めた。

実験後の質問項目　三つのフェーズが終了した後、質問紙への回答を求めた。

抑制フェーズにおいて代替思考が生成しやすかったかどうかを検討するために、代替思考操作のあった温かさ思考条件および有能思考条件にのみ、指示された内容を書くのはどのくらい難しかったかを 7 件法で尋ねた(1: 全く難しくなかった－7: 非常に難しかった)。加えて、高地位者の有能さを考えることが脅威を高める可能性を検討するため、東大生に対して「競争意識」、「不安」、「劣等感」、「脅威」をどの程度感じたかを 7 件法で尋ねた(1: 全く感じなかった－7: 非常に感じた)。また、本研究では就職活動場面を扱ったため、大学卒業後の進路希望として「就職」、「大学院進学」、「その他」のいずれにあてはまるかを回答するよう求めた。

最後に、それぞれのフェーズの関連に気づいたか否かをチェックし、実験の目的および操作についてデブリーフィングを行い、実験を終了した。

結果

データの整理と分析の方針

本研究では、抑制対象との直接的な競争場面を設定するために、就職活動場面を呈示した。そこで、大学卒業後の進路として、企業への就職を希望している 62 名(男性 42 名、女性 20 名、平均年齢 19.31 歳、SD = 1.18)を分析対象とした。条件ごとの人数は、統制条件は 15 名、単純抑制条件は 17 名 、温かさ思考条件は 17 名、有能思考条件は 13 名であった。

本研究では、自尊感情得点を連続変量として分析に投入するため、自尊感情得点はセンタリングした(M =3.18, SD =0.64)。そして、条件とセンタリングした自尊感情得点の積の項を求めた。次に、上記の条件、自尊感情得点、およびそれらの積の項を独立変数とした一般線形モデルによる分析を行った。[2)]

操作チェック

抑制と代替思考の操作チェック　抑制フェーズにおける操作の有効性を確認するため、記述された文がどの程度東大生ステレオタイプ(能力、人柄)に当てはまるかを、評定者に条件がわからない状態で評定させ、それぞれ記述冷たさステレオタイプ度(1: 温かい－5: どちらともいえない－9: 冷たい)、記述有能ステレオタイプ度(1: 無能－5: どち

らともいえない－9: 有能)とした。

統制条件以外の 3 条件が東大生の冷たさを抑制していたかを検討するために、記述冷たさステレオタイプ度に対して先述した一般線形モデルによる分析を行ったところ、抑制操作の主効果のみが有意であった($F(3, 54) = 24.02$, $p < .001$)。多重比較(Bonferroni の検定)の結果、統制条件($M = 6.07$, $SD = 1.16$)に比べて、単純抑制条件($M = 4.06$, $SD = 1.39$; $p < .01$)、温かさ思考条件($M = 2.71$, $SD = 1.35$; $p < .01$)、および有能思考条件($M = 5.08$, $SD = 0.28$; $p = .11$)はいずれも記述冷たさステレオタイプ度が低かった。また、温かさ思考条件は他の 3 条件に比べて有意に記述冷たさステレオタイプ度が低かった($ps < .001$)。このことから、抑制の操作は有効であったと考えられる。

また、単純抑制条件および温かさ思考条件において、反ステレオタイプの温かさを代替思考としていることを確認するために、記述冷たさステレオタイプ度について、中点(5)からの差の検定を行った。その結果、統制条件は有意に中点よりも記述冷たさステレオタイプ度が高かった($t(14) = 3.55$, $p < .01$)。すなわち、抑制教示がなければ、参加者は東大生に対するネガティブなステレオタイプに基づいて記述することが示された。他方、単純抑制条件および温かさ思考条件は有意に中点よりも記述冷たさステレオタイプ度が低く(それぞれ $t(16) = 2.79$, $p < .05$; $t(16) = 6.96$, $p < .001$)、温かさを記述していた。このことは、単純に抑制を行った場合には、抑制する特性と同次元上の反ステレオタイプを代替思考として用いることを示している。また、温かさ思考条件では教示通り温かさに基づいて記述していたことから、代替思考の操作は有効であったと考えられる。なお、有能思考条件は中点との差はなく($t(12) = 1.00$, *ns.*)、冷たさを記述していなかった。

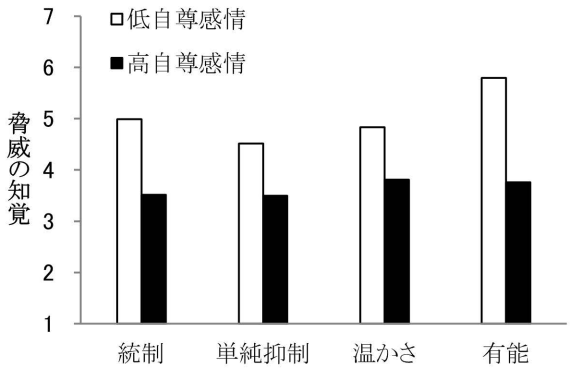

Figure 1 自尊感情ごとの脅威の知覚

また、有能思考条件の代替思考の操作が有効かを検討するため、記述有能ステレオタイプ度に対して同様の分析を行った。その結果、条件の効果のみ有意であった($F(3, 54) = 9.56$, $p < .001$)。有能思考条件($M = 7.31$, $SD = 1.44$)はいずれの条件よりも記述有能ステレオタイプ度が高かった($ps < .001$)。よって、有能思考条件の代替思考操作も有効であったと考えられる。

競争意識と脅威の知覚 本研究では、競争意識を感じやすいような場面を設定したうえで別次元思考方略の有効性を検討した。そこで、本研究の場面設定によって、競争意識を感じていたことを確認するため、記述課題の東大生に「競争意識を感じた」という項目への回答に対して、中点(4)との差を検定したところ、中点よりも有意に得点が高かった($M = 4.58$, $SD = 1.62$; $t(61) = 2.83$, $p < .01$)。また、この回答に対して一般線形モデルによる分析を行ったところ、いずれの主効果、交互作用も有意ではなかった($Fs < 1.21$)。これらの結果から、条件や自尊感情によらず、本研究の場面設定によって、全体的に競争意識を感じていたと考えられる。

他方で、本研究では、脅威の知覚が自尊感情によって異なることを想定していた。そこで、東大生に「不安」、「劣等感」、「脅威」を感じたという項目への回答を合算平均し($\alpha = .86$)、脅威の知覚の指標とした。この指標に対して、同様の分析を行ったところ、自尊感情の主効果が有意であった($F(1, 54) = 10.83$, $p < .01$)。自尊感情得点が低い場合($M = 5.03$)は高い場合($M = 3.65$)よりも東大生に脅威を感じていた。これは、自尊感情が脅威の緩衝材になっているという知見と一致する結果であった(Pyszcynski et al., 2004)。なお、抑制操作の主効果および交互作用はいずれも有意ではなかったものの($Fs(1, 54) < 1$, *ns*)、自尊感情得点の±1SD の地点でのそれぞれの条件の効果をみるために、探索的に自尊感情得点高低(-1SD, +1SD)ごとに予測値を算出した(Figure 1)。その結果、有意には至らなかったものの、自尊感情得点が低い場合には、東大生の有能さに関して考えるよう指示された有能思考条件において他の条件よりも脅威の知覚の程度が高いパターンが見られ、他方、自尊感情得点が高い場合には、条件間に差は見られなかった。また、条件ごとに自尊感情得点の効果を検討したところ、統制条件($\beta = .46$, $t = 1.86$, $p = .086$)では自尊感情得点の効果が有意傾向であったものの、単純抑制条件($\beta = .26$, $t = 1.06$, *ns*)および温かさ思考条件($\beta = .32$, $t = 1.30$, *ns*)では

自尊感情による有意差は見られなかった。しかし、有能思考条件においては、自尊感情得点が低い場合は高い場合よりも東大生に対して脅威を知覚していた($\beta = .65$, $t = 2.84$, $p < .05$)。この結果から、自尊感情得点が低い場合には、東大生の有能さについて考えることは、ことさらに脅威の知覚を強めてしまうという可能性が示唆された。

リバウンド効果の生起

測定フェーズの対人認知課題においてリバウンド効果の測定を行った。評定に長時間かかった回答は、社会的望ましさを考慮していた可能性があり、ステレオタイプのアクセスビリティを反映した指標として望ましくないため、除外することとした。Bargh & Chartrand(2000)に基づき、単語ごとに印象評定の回答時間の平均値と標準偏差を算出し、回答時間が 3SD 以上遅いデータを除外した(全体の1.61%)。

冷たさステレオタイプ 4 語への評定値を合算平均し、冷たさ評定得点($\alpha = .68$)とした。この得点が高いほど、冷たさに関するステレオタイプのアクセスビリティが上昇したことを意味する。この値に対して同様の一般線形モデルによる分析を行ったところ、いずれの主効果も有意ではなかったが($Fs < 1.3$)、予測していた抑制操作×自尊感情の交互作用項が有意であった($F(1, 54) = 4.45$, $p < .05$)。自尊感情得点高低(-1SD, +1SD)ごとに条件の単純主効果を検定した。その結果、自尊感情得点が低い場合(-1SD)に抑制操作の主効果が有意であった($F(3, 54) = 3.37$, $p < .05$)。Figure 2 に示したように、多重比較の結果、統制条件に比べ、単純抑制条件($p = .137$)、温かさ思考条件($p < .05$)、有能思考条件($p < .01$)の 3 条件は文章の人物をより冷たいと評定していた。すなわち、以上の 3 条件はリバウンド効果が生起していた。

他方、自尊感情得点が高い場合(+1SD)は抑制操作の主効果が有意傾向であった($F(3, 54) = 2.62$, $p = .06$)。Figure 2 に示したように、有能思考条件は、統制条件($p < .05$)、単純抑制条件($p = .125$)、温かさ思考条件($p < .05$)の 3 条件に比べ、文章の人物をより冷たいと評定していなかった。すなわち、有能思考条件は冷たさのアクセスビリティが低減したことを示唆している。

代替思考の生成しにくさ

本研究では、代替思考が生成しやすいかどうかがリバウンド効果の生起に影響を及ぼすと予測した。そこで、代替思考の操作のあった温かさ思考

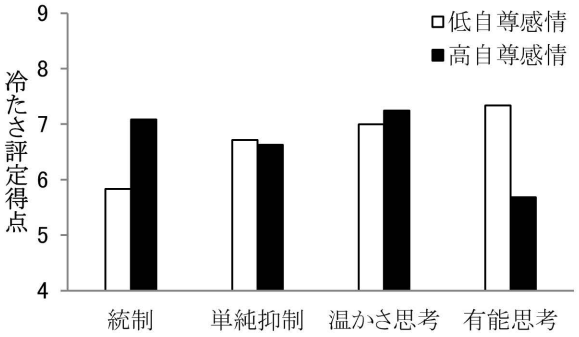

Figure 2 自尊感情ごとの冷たさ評定得点

条件と有能思考条件の参加者に、指示された内容を書くのはどのくらい難しかったかを 7 件法で尋ねた。この回答について、条件×自尊感情得点(連続量)の一般線形モデルによる分析を行った(Figure3)。その結果、いずれの主効果も有意ではなかったが($Fs < 1$, ns)、交互作用項のみ有意であった($F(1, 26) = 5.16$, $p < .05$)。そこで、代替思考の内容の生成しにくさが自尊感情によって異なるのかを simple slope 検定を行い検討した。その結果、温かさに関する思考の生成の難しさは、低自尊感情者($M = 4.34$)と高自尊感情者($M = 4.97$)で異ならなかった($\beta = .25$, $t = 1.04$, ns)。他方、有能思考の生成に関しては、低自尊感情者($M = 5.44$)は高自尊感情者($M = 3.84$)よりも生成は難しかったと回答していた($\beta = .63$, $t = 2.07$, $p < .05$)。また、低自尊感情者は有能思考の方が温かさ思考よりも生成しにくく($p = .106$)、高自尊感情者は温かさ思考の方が有能思考よりも生成しにくかったと回答する傾向が見られた($p = .107$)。この結果から、反ステレオタイプである温かさ思考の生成しやすさは自尊感情による影響がないものの、別次元の有能思考の生成しやすさは自尊感情によって異なることが示された。すなわち、高自尊感情の場合には有能思考は生成しやすいものの、

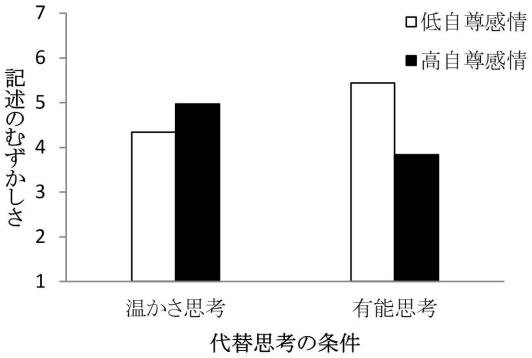

Figure 3 代替思考の生成しにくさ

低自尊感情の場合には有能思考は生成しにくいことを表していた。

考察

本研究では、東大生に対する嫉妬的ステレオタイプを題材として、競争状況における別次元思考方略の有効性とその制限条件を検討した。実験の結果、低自尊感情の場合、これまでの研究(Galinsky & Moskowitz, 2007; 田戸岡・村田, 2010)と同様に、単純に抑制した場合や反ステレオタイプの「温かさ」を代替思考とした場合にはリバウンド効果が生起していた。加えて、別次元思考である「有能」を代替思考とした場合でもリバウンド効果が低減しなかった。すなわち、慈悲的ステレオタイプの抑制とは異なり、嫉妬的ステレオタイプの抑制においては、低自尊感情者では別次元思考方略が有効ではなかった。低自尊感情の場合には、対象の有能さを考えることで脅威の知覚が高まっており、代替思考として生成しにくいという報告がされていた。このことから、高地位者を有能であると考えることはステレオタイプであっても難しいため、リバウンド効果が低減しなかったと考えられる。

他方、高自尊感情の場合には、統制条件における評定値が高かったため、単純抑制条件および温かさ思考条件におけるリバウンド効果の生起は確認できなかったが、有能思考条件はすべての条件と比べて冷たさのアクセスビリティが低減していた。高自尊感情の場合には、高地位者の有能さを考えることが脅威の知覚を高めておらず、ステレオタイプであるために生成もしやすかったと報告されていた。すなわち、別次元思考方略の有効性が示された。このことから、脅威への耐性がある場合には、相手の能力を認めることがリバウンド効果の低減には有効だと考えられる。

本研究の示唆と今後の展望

以上のように、本研究では競争状況を前提とした上で、別次元思考方略の有効性とその制限条件を見出したといえよう。このことから、高地位集団を否定的に考えないためには、抑制対象が自己にとってどのようなものと捉えられるかといった点を考慮することが重要であると示唆されるだろう。昨今は受験戦争や成果・業績を求められるような競争的な状況が多く、外集団成員に対する競争意識を感じる状況は頻繁に生じうる。そのため、本方略の効果の有効範囲と限界点を示すことは、より現実に即したステレオタイプ抑制を考える上で重要な知見となるだろう。

また、本研究の知見はステレオタイプ内容モデルの理解を深めることにつながると考えられる。本研究で検討した別次元思考方略は、低地位者に対しては有効だが(田戸岡・村田, 2010)、高地位者の場合には方略の有効範囲が限定された。こうした方略の有効性に、高／低地位者間で非対称性があるのは、高地位者との上方比較が、自己価値への脅威をもたらすためである。ステレオタイプ内容モデルでは、慈悲的ステレオタイプと嫉妬的ステレオタイプは両面価値的なステレオタイプとして総括されるが、その内容は、我々に及ぼす影響の強さという点で大きく異なると考えられる。すなわち、高地位な外集団成員は有能であるがゆえに、我々を搾取しようとしているのか、協力関係にあるのか、といった点は認知者の利益に直接関わってくる。そのため、嫉妬的ステレオタイプの低減は、慈悲的ステレオタイプの低減よりも困難を伴うのかもしれない。実際、ステレオタイプ内容モデルを行動予測にまで拡張させた BIAS map(behavior from intergroup affect and stereotypes; Cuddy, Fiske, & Glick, 2007)では、社会が安定的で脅威状況にない場合には、利益を得るために有能な外集団と協力関係を築く受動的援助が生じやすいが、不況などの脅威のある状況では一転して能動的危害が生じやすいことを主張している。以上のように、Cuddy et al.(2007)は社会的な脅威状況について議論しているが、本研究では、自己への脅威といった個人的な脅威状況であっても、高地位者のステレオタイプ抑制に影響を及ぼす可能性があることを示している。そうした点で、ステレオタイプ内容モデルに新たな知見を加えたといえるだろう。

本研究は、ステレオタイプ抑制やその関連領域に示唆を与えるものの、いくつか限界点も存在する。まず、本研究では別次元思考方略の有効性が限られたのは、脅威によるワーキングメモリの低減が理由であると考えた。脅威の知覚に関して、探索的な分析によって本研究のメカニズムを示唆するような結果を得られたものの、統計的には不十分な部分が見られた。社会的望ましさの観点などから、脅威の知覚を自己評定によって測定することは難しいと考えられるため、今後はより直接的に抑制後のワーキングメモリを測定することが求められるだろう。

また、本研究の結果は、別次元思考方略がリバウンド効果を低減させる可能性を示唆するものの、代替思考としてステレオタイプを用いることに伴う

問題が指摘されるかもしれない。Fiske らは、ネガティブなステレオタイプ的特性は社会的に常に問題視されているが、その影で、ポジティブなステレオタイプ的特性が偏見の維持に寄与していると主張している(Fiske & Cuddy, 2006; Glick & Fiske, 2001)。すなわち、ポジティブなステレオタイプを強調することが、むしろ偏見の維持や強化につながる可能性があることには留意が必要である。

ただし、長期的に本研究の方略を用いた場合でも、有益な知見を得られる可能性もあるだろう。私たちは、対人認知の際に、ある一つの面が優れていると、他の面も優れているように他者を認知することがある。この認知傾向はハロー効果(halo effect)と呼ばれ、例えば美人は性格も良いというような評価をされやすい(Dion, Berscheid, & Walster, 1972)。本研究で提案した別次元思考方略によって、ポジティブな側面を強調し続けることで、ハロー効果が生起する可能性があるだろう。また、高地位者の「有能さ」を強調する本方略は内外集団の積極的な接触や協力を促す可能性がある。Cuddy et al.(2007)の BIAS map によれば、私たちは望ましい結果を得るために、高地位で優秀な外集団成員と協力することがあると指摘されている。通常、外集団成員との相互作用は避けられる傾向があるものの、集団間の接触を繰り返すことで、お互いに好意的な印象をもたらすということが明らかになっている(接触仮説; Allport, 1954)。そのため、有能な外集団成員との接触が、最初は義務的なものであったとしても、接触を続ける中で相手の印象を好転させたり、内集団の知覚を高めるといった可能性もあるだろう。今後は、ポジティブなステレオタイプの問題点も考慮に入れた上で、長期的な視点を持ちつつ、ステレオタイプ抑制に有効な抑制方略を検討していく必要があるだろう。

引用文献

Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wesley.

Ashcraft, M. H., & Kirk, E. P. (2001). The relationships among working memory, math anxiety, and performance. *Journal of Experimental Psychology: General*, 130, 224-237.

Bargh, J. A., & Chartrand, T. L. (2000). The mind in the middle: A practical guide to priming and automaticity research. In H. T. Reis & C. M. Judd (Eds.), *Handbook of research methods in social and personality psychology*. New York: Cambridge University Press, pp.253-285.

Beilock, S. L., Rydell, R. J., & McConnell, A. R. (2007). Stereotype threat and working memory: Mechanisms, alleviation, and spill over. *Journal of Experimental Psychology: General*, 136, 256-276.

Brewin, C. R., & Smart, L. (2005). Working memory capacity and suppression of intrusive thoughts. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 36, 61–68.

Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2007). The BIAS Map: Behaviors from intergroup affect and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology,* 92, 631-648.

Dion, K. K., Berscheid, E., & Walster, E. (1972). What is beautiful is good. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 285-90.

Eysenck, M.W., & Calvo, M.G. (1992). Anxiety and performance: The processing efficiency theory. *Cognition and Emotion*, 6, 409–434.

Fiske, S. T., & Cuddy, A. J. C. (2006). Stereotype content across cultures as a function of group status. In S. Guimond (Ed.), *Social comparison and social psychology*. New York: Cambridge University Press, pp.249-263.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.

Galinsky, A. D., & Moskowitz, G. B. (2007). Further ironies of suppression: Stereotype and counterstereotype accessibility. *Journal of Experimental Social Psychology*, 43, 833-841.

Geraets, E., Merckelbach, H., Jelicic, M., & Habets, P. (2007) Suppression of intrusive thoughts and working memory capacity in repressive coping. *American Journal of Psychology*, 120, 205–218.

Gilbert, D, T., & Hixon, J, G. (1991). The trouble of thinking: Activation and application of stereotypic beliefs, *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 509-517.

Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent stereotypes as legitimizing ideologies: Differentiating paternalistic and envious prejudice. In J. T. Jost & B. Major (Eds.), *The psychology of legitimacy: Emerging perspectives on ideology, justice, and intergroup relations*. New York: Cambridge University Press, pp.278-306.

池上知子 (1992). 社会的認知の情報処理 多鹿秀継・川口潤・池上知子・山祐嗣(著) 情報処理の心理学―認知心理学入門― サイエンス社 pp.106-156.

Inquisit 3.0.5.0. [Computer software]. (2011). Seattle, WA: Millisecond Software.

Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B., & Jetten, J. (1994). Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67,

808-817.
森津太子 (2000). 対人認知における文脈効果－生起メカニズムと調整要因－ 風間書房
沼崎 誠 (2013). システム再生産に寄与する心理メカニズムの検討－社会変革の促進に向けて－ 科学研究費補助金研究成果報告書 課題番号 22530675, 2010 年度～2012 年度, 基盤研究(C)
Pyszczynski, T., Greenberg, J., Solomon, S., Arndt, J., & Schimel, J. (2004). Why do people need self-esteem? A theoretical and empirical review. *Psychological Bulletin*, **130**, 435-468.
Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image. Princeton*, NJ: Princeton University Press.
佐々木美加 (1997). 学歴が人物評価に与える影響 産業・組織心理学研究, **10**, 145-154.
Schmader T., & Johns M. (2003). Converging Evidence That Stereotype Threat Reduces Working Memory Capacity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 440-452.
Srull, T. K., & Wyer, R. S. Jr. (1979). The role of category accessibility in the interpretation of information about persons: Some determinants and implications. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1660-1672.
田戸岡好香・村田光二 (2010). ネガティブなステレオタイプの抑制におけるリバウンド効果の低減方略—代替思考の内容に注目して— 社会心理学研究, **26**, 46-56.
田戸岡好香・村田光二 (2011) 脅威が嫉妬的ステレオタイプの抑制に及ぼす影響 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 363.
Tado'oka, Y., & Murata, K. (2012). Consequences of suppressing envious stereotypes under threat from suppressed target. Poster presented at the 13th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, San Diego, California, January, 2012.
Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. *Advances in Experimental Social Psychology*, **21**, 181-227.
Wegner, D. M. (1994). Ironic processes of mental control. *Psychological Review*, **101**, 34-52.
Wegner, D. M., Schneider, D. J., Carter, S. R., & White, T. L. (1987). Paradoxical effects of thought suppression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 5-13.
山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

註

1) 本論文は第一著者が平成 25 年度に一橋大学大学院社会学研究科へ提出した博士論文の一部を加筆・修正したものである。

2) 抑制対象として東京大学の男子学生の写真を呈示したため、参加者の性別を要因として含んだ分析を行ったが、いずれの分析においても性別を含む有意な効果は見られなかった。よって、以降の分析では参加者の性別は要因として含めなかった。

The effects of the replacement thought strategy on suppressing envious stereotypes

Yoshika TADO'OKA (*Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University*)
Koji MURATA (*Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University*)
Kunio ISHII (*Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University*)

This study investigated the effects of the replacement thought strategy on suppressing envious stereotypes. Suppressing stereotypic thoughts ironically leads to a rebound effect (i.e., an increase in stereotype accessibility after suppression). As most stereotypes are ambivalent, to prevent the rebound effect on suppressing one stereotype dimension (e.g., cold), we examined whether the replacement strategy focusing on another dimension (e.g., competence) could be effective. Participants were asked to suppress negative stereotypes toward a relatively superior university student, and were given the replacement thought. Then, stereotype accessibility was measured. Results showed that the rebound effect was diminished in participants with high self-esteem but not in those with low self-esteem, because they perceived threat when they focused on the competence of the superior other. We discuss the efficacy and limitations of using other stereotype dimensions to prevent the rebound effect, focusing on the stereotype content model.

Keywords: envious stereotype, suppression, rebound effect, replacement thought, stereotype content model.